

## 同一テキストを用いたリスニングを中心に 技能間の正の転移を有機的に関与させた四技能統合授業モデル

小樽商科大学専門職大学院 (OBS) 小林 敏彦

### 要約

リスニングが他の言語技能、特にリーディングへの学習上の正の転移が明らかになっている。本稿では、筆者が大学の学部および大学院で実践している、リスニング活動とそのスクリプトをリーディング教材として活用し、さらにスピーキングおよびチャットと掲示板を使ったライティング活動を取り入れ、文法・語彙力の強化も目指した授業の一モデルを紹介する。本稿では、1)リスニングのレディネスを高める洋楽を活用した「準備活動」、2)内容スキーマ喚起のためのインタラクティブなオーラルプレゼンテーションや映像提示、文法・語彙タスクを合わせた「事前活動」、3)記憶負担を軽減するためにタスクの指示を事前に提示した内容理解のための聞き取りと音声認識のための聞き取りタスクからなる「聴解活動」、4)本文の内容に関する英語での質疑応答および語彙・構文および内容に関する口頭説明、スクリプトを活用したポーズを入れた黙読、音読、復唱(暗唱)、シャドウイングの「事後活動」、5)ペア・グループワークでの口頭のインタビューやディスカッション、チャット機能を使った英語での自由な意見交換、ニュースの内容に関するコメントをBBS(掲示板)に載せ全員が閲覧し、相互に添削し合う「補足活動」の5つのフェーズからなる授業モデルを示す。

### I. はじめに

リスニングおよびリーディングの認知及び習得のプロセスに関して、両技能は medium (channel) は oral と written という点で異なるが、mode は共に receptive (実際は、segmentation 等を行おうとする積極的な活動である) であり、それぞれの器官で認知された情報は共に最終的には学習者の脳の優位半球にある言語理解に関与するウェルニッケ領域(発話はブローカー領域)で処理されると考えられている。四技能間の正の転移(positive transfer)に関しては、リスニングから他の3つの技能、特にリーディングへの転移が特に大きいとする研究が多いことから、リスニング活動を授業および学習の中心に据え、さらに他技能に関わる活動を有機的に組み合わせた四技能のバランスのとれた授業の展開が望ましい。

リスニング活動後に学習者が聞いた英文を文字で確認したくなるのは当然である。教える側にとってもスクリプト(原稿)がある方が説明しやすく、活字の提示により、文法や語彙、談話構造などが詳しく説明できる。ニュースの聞き取りの後には、ニュース原稿(news script)を、洋画の聞き取りの後には脚本(screenplay)の一部を、洋楽の聞き取りの後には歌詞(lyrics)を提示し、じっくりと読ませることで内容を完全に把握させるリーディング活動に移行することが可能である。いずれも音声認識のための空欄穴埋め用のタスクとして重用してから、解答後に完全なスクリプトが必然的に学習者の眼前に提示されることになる。

### II. 話し言葉と書き言葉のテキスト比較

ニュースや洋画などの音声のスクリプトがリーディング教材として用いる場合に、話し言葉と書き言葉の違いから質・量ともにやや物足りないテキストではないかという懸念もあるだろう。スクリプトは、数秒から数分程度のものであれば通常の英書の1ページ分にも及ばない長さのも

のもある。リスニングで使われる放送原稿とリーディングで使われる英文記事との間のテキストの特性について、どのような相違点があるかどうか興味のあるところである。この点に関して、小林 (2002) は、ニュース原稿、英字新聞、雑誌の 3 つ (平成 13 年 10 月 1 日の皇太子妃の出産を伝えるインターネット上で公開された英文およびその他数点のニュース) を比較し、語彙・構文については、英字新聞とニュース原稿はたいへん類似していると指摘している (下記の英文を参照)。

小林 (2002) は、雑誌については、やや読者層が教養の高いグループに狭まれているために、散文調の凝った表現が目立つと指摘し、Ota & Otsu (2002) は TIME 誌について、英文は明晰で時事英語の範とすべきであるという見解がある一方で、Ito (1986) のように TIME 誌への英語学習者の思い入れを「TIME 信仰」と呼び、日本では一般に良いと考えられている学習法の中で誤解されており、格調高くすばらしい文体であることを認めつつも、コミュニケーションの手段としての英語という観点からは教材としては不適切であると断言している研究者もいる。少なくともニュース原稿が英字新聞と遜色のないテキストであると考えられる以上、リーディング教材として扱うことはけっして不適切ではないと考えられる。

ニュース原稿 (VOA News)

Japan's Crown Princess Masako gave birth Saturday to a daughter. As VOA Correspondent Amy Bickers reports from Tokyo, the birth of a girl raises the possibility of a succession crisis for the world's oldest hereditary monarchy. A top official of Japan's Imperial Household Agency announced Saturday that both mother and daughter are well, following the baby's birth at 2:43 p.m. local time. When the announcement was made, crowds of Japanese surrounding the gates of Tokyo's Imperial Palace cheered and clapped.

英字新聞 (The Japan Times)

TOKYO, Dec. 1 -Japanese celebrated the birth of a princess today with bitter sweet cheers, their joy at the first offspring of the next emperor tempered because there still is no male heir. The girl was born to Crown Princess Masako, 37, and Crown Prince Naruhito, 41, whose failure to produce an heir in eight years of marriage has caused worries about the future of the world's oldest imperial family.

英文雑誌 (TIME)

Inside Togu Palace in central Tokyo, royal handlers are busily and secretly preparing for an event that will breathe new life into Japan's cloistered royal family. Crown Princess Masako is expected to give birth to her first child this week or next, ending an eight year wait that frustrated a nation impatient for a royal heir to the Chrysanthemum Throne, which in mythological terms, anyway, is said to date back more than 2,600 years.

ただし、Ito (1986) は日本で発行されている英字新聞の国内ニュースについては、和文英訳の域を出ていない場合が多いと述べている。この見解は従来から多くの購読者や英語教育者によって指摘されてきたが、Kobayashi (1999) は、The Daily Yomiuri、Asahi Evening News、Mainichi Daily News の翻訳記事 (同一期の同一テーマの英訳社説) に The Japan Times を加え、米国の The Washington Post、The New York Times、USA Today、英国の The Times、The Guardian、The Independent の比較を試みた。443 人の日本人大学生にほぼ同一の内容の社説を読んでもらい、理解度と不明語彙項目数を調査、さらに日本の 4 紙の社説を英語教師を中心とする英語の母

話者 106 人に読んでもらい、文法性 (grammaticality)、明解性 (clarity of meaning)、自然さ (naturalness)、構成 (organization) の 4 つの基準について主観的判定 (metalinguistic judgment) してもらった結果、英米の英字新聞の方が日本語母話者には、理解が困難で不明語彙も多いことが判明、さらにもっとも彼らが明解に理解できた社説が英米人には、もっとも理解が困難で他の基準も低く評価された。また、日本で発行されている英字新聞の中で翻訳記事ではない The Japan Times の社説が英語母話者には高い評価を受け、続いて翻訳社説の 3 紙の中では Mainichi Daily News が英語母話者の全ての評価において他を統計的有意差をもって引き離す評価を得た。

### III. 四技能の転移と相関性

四技能間の転移に関しては、竹蓋 (1996: 71) が以下のように過去の研究をまとめている (○は転移が大、×は転移が小またはないことを表わす)：

×	読む	→	聞く	(Mueller, 1980; Anderson & Lynch, 1988)
×	話す	→	聞く	(Pimsleur & Quinn, 1971; Chastain, 1987)
×	書く	→	聞く	(Wada, 1992)
○	聞く	→	読む	(Nord, 1975, 1981; Lund, 1991)
○	聞く	→	話す	(Asher, 1972; Anderson and Lynch, 1988)
○	聞く	→	書く	(Wada, 1992; 竹蓋他, 1993)

上記以外に、リスニングからリーディングへの転移を確認した Asher (1972)、Reeds et al (1977)、寺内 (1989)、吉田他 (1999)、岡 (1979) の研究、リスニングからスピーキングへの転移を確認した Postovsky (1974) や Lyczak (1979) などの研究がある。関連して、梅本 (1987) は、練習の発音の進歩は連続的で徐々に進歩するが、リスニングの進歩は段階的で非連続的であると主張している。また、玉井 (1992) はシャドウイングの結果、学習者のリスニング力が伸びたと報告している。

リスニングからリーディングへの正の転移について門田他 (2002: 207-208) は諸研究の成果を以下のようにまとめている：

- 1) リスニングからリーディングへの技能のプラスの転移が見られるのは、リーディングにおいてもリスニング時に行っているような音韻処理が行われているからである。
- 2) 視覚情報も聴覚情報も同じ内的言語に変換され、2 つの技能間で共有している。
- 3) 第二言語学習においても、初期の段階でリスニング指導に重点を置くことにより、その技能がリーディングに転移し、読解力が伸びる。
- 4) リーディングからリスニングへの転移は、その逆ほど簡単には起こらない。これは、学習者が認識している単語の発音が、ネイティブスピーカーの発音と大きく異なること、口頭で聞いてもその単語だと認識できないことに起因する。
- 5) 学習者はそれぞれ自分の最適速度を持っており、その速度はリーディングもリスニングもほぼ同じ速度にまで伸びる傾向にあり、英語力が高いほど速くなる。
- 6) 熟達した読み手や母語の書字が英語に近い場合、視覚処理が強くなり、読解時に起こる音韻処理に頼らないで、単語認知ができるようになるのではないかと考えられる。

さらに、リスニング力とリーディング力の相関関係を調査した代表的な研究に関しては、武井他（2002：94）が以下のようにまとめ、リスニング力とリーディング力は相関が高く、リスニング力の伸長がリーディング力の伸長に移転する可能性が高いと報告している：

研究者	相関性	対象
板倉・後田（1971）	0.79	大学生
Carroll（1972）	0.73	アメリカ大学生
天野他（1972）	0.67	大学生
小池他（1979）	0.02-0.5	大学生
石川（1986）	0.53	高校1年生
寺内他（1989）	0.56	高校3年生
DeMauro（1992）	0.672	TOEFL 受験生

これに関連して、Wall et al.（1994）の研究では、プレメントテストのために同日に行われたリスニング、リーディング、ライティング、文法の4つのテストの中で、リスニングともっとも相関性が高かったのは文法であると報告している。また、武井他（2002）は、Buck（1992）のリスニングテストとリーディングテストが測定している特性の研究で、用意された文章を朗読した音声では特定の違いは確認されなかったが、ポーズや言い直しなどの自然な発話の場合には、特性の違いが確認されたと紹介している。

なお、転移が一定期間の特定の指導を含む実験群と含まない統制群（対照群）との結果を比較した実証研究から明らかになり因果関係が保障されるのに対して、相関性は一時期の特定のテスト結果を統計的に比較したものであり因果関係を保障するものではない。

#### IV. リスニングと他技能を統合した授業形態

1 講の授業をすべてリスニング活動だけで終わらせる「リスニング・オンリー」の授業よりも他の技能を使った活動を逐次的または同時に行う方が、学習内容の方が学習の観点と現実の言語使用の観点からも望ましい。前者の逐次的統合形態を「スキル分離型」、後者の同時的統合形態を「スキル併用型」と本稿では呼ぶこととする。

スキル分離型 (skill-independent) とは、リスニング活動に他の活動を逐次的に併用する授業形態である。例えば、まず音声のみを聞かせて内容把握を行わせたのちに、スクリプトを提示し音読させ内容把握をさせる。次に、内容に関する質疑応答をしたり、空欄を設けた別シートを配布し、音声認識のために音声聞かせ穴埋めさせるタスクを与える。さらに、再度スクリプトに戻り、解答および文法・語彙の解説を行うというように、音声とスクリプトを交互に提示するスパイラルな授業形態が可能である。

スキル併用型 (skill-interdependent) とは、リスニング活動に他の活動を同時平行的に組み合わせさせて進行させる「リスニング+ $\alpha$ 」のタスク形態である。CD (MD/テープ) を聞かせながら読ませる、すなわち「リスニング+リーディング」で「黙読」、「リスニング+スピーキング」で「音読」「暗唱」「シャドウイング」、「リスニング+ライティング」で「ディクテーション」「ノート・テーキング」、さらに「リスニング+動作」で「TPR (= Total Physical Response)」（Asher, 1977）などの複数技能を同時に使う活動が可能になるのである。

音声の提示の仕方と内容の理解の関係について、河野（1981、1990）は、0.3 から 0.4 秒以下の音節間隔で結ばれた音節数が  $7 \pm 2$  の意味のある単位を PSU (perceptual sense unit) と呼び、

この長さに区切ってポーズを設け音声を聞かせることで内容の理解が高まったことを実証している。この実証結果は、スキル併用型のタスクに活かすべきである。黙読では学習者に対し、教師または録音し直した音声を聞かせながら読まれている部分に目を追い意味の理解に務めさせる。けっして左に戻ることをないよう指導し、集中させる。音読では、同時に音読させたり、逐次的に音読させる。また、暗唱 (Read and look up.) では目線をスクリプトから離し音読させることもできる。Suzuki (1991) は、句または節単位に区切ってポーズを入れて聞かせた方が学生の読解速度が伸び、聴解力も向上したと報告している。門田他 (2002: 368) は、聞きながら読むことで「2度同じ内容を内的な音韻情報に変換することになる」と述べている。

## V. 5段階 15 ステップからなる授業形態

筆者が大学で日々実践している授業の形態 (CALL 教室使用) は以下にまとめられる。授業の進行、文法・語彙の解説もすべて英語で行うことで 90 分間英語のインプット (ただし、授業終了時間前の 5 分間は日本語でまとめたり質疑応答をすることもある) が断続的にも供給されるが、理解ができていないと判断できた場合には日本語を臨機応変に用いる。各 Step で示されている L (Listening) / R (Reading) / S (Speaking) / W (Writing) は学習者が実際にそのステップで使用する技能を表わしている。

### PHASE I. Warm-up Activities

- Step1. L Listening to the refrain
- Step2. R: Reading the lyrics and filling in the blanks
- Step3. LRW Listening to the whole song and filling in the blanks
- Step4. LRS Reading aloud (=singing together)

### PHASE II. Pre-listening Activities

- Step5. L Interactive oral presentation with possible visual cues (video)
- Step6. LRW Vocabulary preview / Scrambled sentences

### PHASE III. Listening Activities

- Step7. LR Listening for comprehension (Q&A / multiple choice / T or F)
- Step8. LR Listening for perception (focused listening / fill in the blanks)

### PHASE IV. Post-listening Activities

- Step9. LRS Vocabulary & structural review with T/S interactions
- Step10. LR Script reading (silent reading to the tape/CD with pauses)
- Step11. LRS Reading aloud and looking up with pauses to the teacher
- Step12. LS Shadowing

### PHASE V. Supplementary Activities

- Step13. LS Interview & discussion in pair or group work
- Step14. RW Interview & discussion through chat
- Step15. WR Writing comments on BBS

## PHASE I. 準備活動 (Warm-up Activities)

筆者の授業では内容に関わらず授業へのレディネスを高めるために洋楽を聞かせて穴埋めをさせ、一斉に起立して歌う授業を十数年続けている。卒業生からも授業の思い出としてまっさきに洋楽のことが語られる。音声認識能力を高めるだけでなく、社会スキルのひとつとして英語の持ち歌という個人の資産を増やすことにもなる。

### Step1. Listening to the refrain

まずは、洋楽の歌詞のさび (refrain) の部分だけ聞かせて、内容を理解させる。全部聞かせる  
と数分の時間がかかるので、ここでは準備の中の準備という位置付けで短時間で済ませる。あえ  
て設問などは用意しないで、何人かの学生をランダムに指名して、“Have you ever heard this  
song before?” “What is song about?” “What does this song describe?” などの質問をする。次  
に、Step2 として以下にあるような歌詞シートを配布する。CALL 教室を使用する授業の場合に  
は、筆者の HP 上にある歌詞演習のページ (<http://www.ne.jp/asahi/toshi/koba/asonglyrics2003.htm>) にアクセスさせて見せることで、シートの配布は省くことができる。

#### 洋楽の歌詞シート

##### TAKE ME HOME, COUNTRY ROAD

by John Denver

Almost (1: h \_ \_ \_ \_ ) West Virginia  
 Blueridge Mountains, Shenandoah River  
 Life is old there, older than the (2: trees / three / seas )  
 Younger than the mountains, growing like a (3: breathe / breeze / bees)  
 Country roads Take me home To the place I (4: b \_ \_ \_ \_ )  
 West Virginia Mountain Mama Take me home, country roads  
 All my memories (5: g \_ \_ \_ \_ ) round her  
 Miner's lady stranger to blue (6: w \_ \_ \_ \_ )  
 Dark and dusty painted on the sky  
 Misty taste of Moonshine, (7: t \_ \_ \_ s) drop in my eyes  
 Country roads Take me home To the place I (4: b \_ \_ \_ \_ )  
 West Virginia Mountain Mama Take me home, country roads  
 I hear her voice in the morning (8: ours / hours) she calls me  
 Radio reminds me (9: \_ \_ ) my home far away  
 And driving down the road that I get a feeling  
 That I should have been home yesterday yesterday  
 Country roads Take me home. To the place I (4: b \_ \_ \_ \_ )  
 West Virginia Mountain Mama Take me home, country roads  
 Country roads Take me home. To the place I (4: b \_ \_ \_ \_ )  
 West Virginia Mountain Mama Take me home, country roads  
 Take me home, (down) country roads Take me home, (down) country roads

### Step2. Reading the lyrics and filling in the blanks

シートを配布したら、音声を流さずに歌詞全体を黙読させる。これがリーディング活動として  
の最初の R の部分になる。読みながら文脈から空欄に適語 (句) を入れたり選択するように指示  
する。何度も聞くことができるさびの部分は空欄とし、一回しか聞けない部分は聞き取りが難し  
い分、類似した語句の選択肢を作るようにする。この段階では時間の制限もあるので、なるべく  
早く読むように指示し、解答などは行わない。

### Step3. Listening to the whole song and filling in the blanks

音声を流し聞き取った語句を空欄に入れたり、選択させる。本来 2 回流の方がよいが、時間  
の制限から 1 回だけ流すのが現実的である。この段階では、聞きながら同時に歌詞を読み、語句

を選択したり書き込むのでL/R/Wの3つの技能が関与することになる。曲が終わったら、ただちに解答を行うが、時間の許す限り、まず学生同士でペア・グループワークで互いの解を確認させてから正解を伝えるようにしたい。この際も、なるべく個人に当てて解答させるようにしたい。

#### Step4. Reading aloud (=singing together)

受講者全員に起立を求め、教師自らも大きな声を上げて、音声を流しながら合わせて歌う。さびの部分はなるべく暗唱させて歌うように指示する。また、教室外でも機会があればカラオケなどで選曲し歌うように奨励する。この段階では、聞きながら、歌詞カードを見て、歌うのでL/R/Sの3つの技能が関与する。

### PHASE II. 事前聴解活動 (Pre-listening Activities)

#### Step5. Interactive oral presentation with possible visual cues (video)

洋楽を歌ってレディネスが確保された後は、スキーマ喚起のために、ビデオなどの映像やニュースの内容に関連した情報や要約を口頭で伝え、さらに学生との英語での質疑応答を入れたインターラクティブ・オーラルプレゼンテーションを行う。内容に関連したビデオなどが入手可能な場合は、それも提示しながら行うようにしたい。

#### Step6. Vocabulary preview

さらに以下にあるようなキーワードとその定義文を選ぶ Vocabulary preview を行うことで語彙に対する不安を払拭するだけでなく、列挙した語彙自体から内容の一部を知ることになり、内容スキーマの喚起に役立つ。

1. kindergarten	•	• the number of those who have died
2. haven	•	• a calm and safe place
3. sanitary	•	• clean; not dangerous to health
4. infrastructure	•	• urgent
5. toll	•	• unbelievable
6. incredible	•	• a school for young children before elementary school
7. dire	•	• basic systems needed to keep a country going

また、Vocabulary review を行う代わりに、または併用して Scrambled sentences を行うこともできる。これは以下にあるように、本文中の主要なセンテンスをそのままの形または近い形で抜き出し、それを意味あるチャンクに分けて、ランダムに並べ換えたものを提示し、学生に復元させる方法である。

- |  |
|--|
| 1. have discovered / in the morning / a good reason / to sleep longer<br>Scientists _____. |
| 2. the next day / a good night's sleep / perform better / people<br>After _____.           |
| 3. the / studied / of people / sleep activity<br>The researchers _____.                    |
| 4. were trained / then tested / 12 hours later / in the morning<br>The people _____.       |
| 5. by 20% / that people's performance / demonstrated / improved<br>They _____.             |

このタスクでは、正しい構文の知識が確認できるだけでなく、語彙の解説をすることも可能である。ただし、センテンスの選択を誤ると本文の情報を与え過ぎ、その後の内容把握のための聞き取りタスクが無意味になることもあるので注意しなければならない。

他にスキーマ喚起のための事前聴解活動として、画像や図形などの非言語情報の提示／実物 (realia) またはそれに準じた物体の提示、和文資料の情報提示、ハンドアウト、パワーポイント等の英文資料の提示、ハンドアウトに印刷された質問に対する選択・自由回答、ペア・グループワークでの質疑応答などがある。

### PHASE III. 聴解活動 (Listening Activities)

#### Step 7. Listening for comprehension (Q&A / multiple choice / T or F)

記憶負担を軽減するために、タスクの指示を事前提示した内容理解のための聞き取りと音声認識のための聞き取りからなる「聴解活動」を行う。まずは内容理解のために、音声を3回流し、毎回設問を変えて特定の情報に集中して聞けるように計らう。1回目は、おおまかな内容に関する質問をひとつ提示し、聞き方のコツなどを指示する。2回目は多義選択 (multiple choice) をひとつ提示し、聞き方のコツなどを指示する。3回目は内容真偽判定 (true or false) を提示し、聞き方のコツなどを指示する。設問の内容は音声を流す度に“generic”から“specific”へ移行するように工夫する。

#### Step 8. Listening for perception (focused listening / fill in the blanks)

さらに音声認識のためには、空欄の穴埋め (fill-in-the-blanks)、語彙選択 (word choice)、相違箇所の指摘 (error correction)、特定語句の聞き取り (focused listening) などがある。筆者の授業では、数字や形容詞などの特定の語句を聞き取る focused listening やスクリプトに空欄や語彙選択を作ったシートを配布して fill-in-the-blanks のタスクを多用している。

### PHASE IV. 事後聴解活動 (Post-listening Activities)

#### Step 9. Vocabulary & structural review with T/S interactions

これまで何回も聞いたり読んだりしているので内容についてかなり理解が深まった段階であると考えられるが、不明語句や理解できない構文等が残っているはずである。丁寧に対処し、解説するようにしたい。これには一文ずつ理解を確かめるために本文の内容に関する英語での質疑応答と語彙・構文および内容に関する口頭説明することが考えられる。



また、レベルに合わせてこのステップは日本語を交えるか、または全て日本語で行った方が学習者は安心するようである。オール・イングリッシュにこだわるならば、一旦すべて英語で説明した後に、同じ内容を日本語で繰り返すこともできる。

#### Step 10. Script reading (silent reading to a CD)

本文の内容を理解した上で、スクリプトを活用した黙読、音読、復唱、シャドウイングの「事後活動」を行う。まずは黙読であるが、音声を流し、学生は聞こえてくる音声に合わせて黙って目を追いながら意味を把握するように指示する。関係節があってもけっして目線を左に戻さないように指示する。これは音声の特性から後戻りできないリスニングと同じ状況をリーディングの際にも作るように、完全な日本語に訳してから理解するのではなく、英語を英語の語順で理解しようとする習慣の形成を促進するためのタスクである。

#### Step 11. Reading aloud and looking up with pauses to the teacher

スクリプト全体の黙読が終わったら、今度は教師が意味のかたまりとして認識され则认为られる句や節、または短いセンテンスの切れ目（PSU）でポーズを入れながら音読し、続いて学生も合わせて音読し、さらに顔を上げて復唱する。教師の音読がポーズまで来たら、“Repeat.”と言って学生にスクリプトを見ながら復唱するように指示する。さらに、“Look up.”または“Up.”と言って学生に顔を上げて目線をスクリプトから離して同じ部分を復唱（暗唱）させる。この方法は一般に“Read and look up.”として以前から知られており、一定の segmentation の仕方を学べる方法である。今読んでいる英文を暗唱しなければならないという意識が働くために英文を読む時の集中力が増すと考えられている。また、音声を停めた箇所にスラッシュ等の印を入れるように指示すると次のタスクに便利である。

#### Step 12. Shadowing

最後に、スクリプトを見ないで英文の語句が聞えた直後、またはほぼ同時に声を出し繰り返すシャドウイングを行う。シャドウイングは元々同時通訳者の養成法として開発されたが、今日ではリスニング力を高め、英文がチャンクとして記憶に定着させ、発音やイントネーションが正確かつ滑らかにさせる方法として一般の英語学習者の間でも実践人が増えてきた。教室の環境が許せば、ヘッドフォンを使用することで学習者自身の声がじゃまにならなくなるが、訓練が進むにつれてヘッドフォンなしでも支障なくできるようになる。高度な技術であるので、慣れないうちは、最初から無理に声を出すことを強要せずに、発話をせずに心の中で音声を響かせる“thinking aloud”、発声せずに唇だけを動かす“liping”、自分自身にしか聞こえない程度にささやく“whispering”を順に経てから行うこともできる。時間があればポーズなしで全文のシャドウイングをさせることもある。

### PHASE V. 補足活動（Supplementary Activities）

#### Step 13. Interview & discussion in pair or group work

これまでは、教師と特定の学生とのインタラクションに限定されていたが、学生同士のペア・グループワークでのインタビューやディスカッションなどの「発話活動」も取り入れたい。スクリプトの内容について自由に会話させたり、次のような質問項目を与えて質疑応答をさせる。

- 1) What do you think about this news?
- 2) Do you agree or disagree with ...?
- 3) Are you for or against ...?
- 4) If you were ..., what would you do?
- 5) If you had been ..., what would you have done?

ただし、学習者の発話行為そのものが英語で行われる授業、すなわち、教師と学生、学生同士の英語でのやりとりが十分行われる状況であれば、発話活動の時間を特別に設ける必要性は必ずしもない。

#### Step14. Interview & discussion through chat

CALL 教室のように学習者1人1人にネットに繋がったパソコンが1台与えられている環境であれば、Step13をそのままネットの上のチャット・ルームを活用して行うこともできる。無料のチャットルームを複数設置して、5～10人程度のグループに分けて英語での自由な意見交換をペアワークさせたり、グループのリーダーが他の構成員に同一の質問をして回答させることもできる。外見上、チャットはパソコンのキーを打込むのでライティングと捉えられるが、会話をするように瞬時に短い英文または単語を発する過程は発話に極めて近く（ブローカー領域→運動中枢→発声器官／手指筋）、よってここでライティングからスピーキングへの転移が期待できると考えられる。また、相手のメッセージを瞬時に読んで返答するので速読の養成にもなる。

#### Step15. Writing comments on BBS

チャットでの対話単位の短い英文を超えて、学習者に本格的な英文を書く機会を与えることも大切である。従来の用紙に書かせて授業時間内に回収し返却する方法では時間と労力を要する。この教師の多大な負担がライティング指導が現場で敬遠されてきた主因であると考えられる。この打開策のひとつとして、ネット上の掲示板（BBS）を活用する方法がある。CALL 教室の場合には、各座席のパソコンからあらかじめ設定しておいた無料の掲示板にニュースの内容に関するコメントや何らかの質問をしてそれを掲示板に書き込ませる。一定時間内にアップさせることで、全員が他の学生の書いたものを閲覧することができる。時間があれば、1、2人の英作文に注目し、フィードバックを与えることもできる。

さらに時間的な余裕があれば、ペアワークとして学生同士が互いの作文を添削し合うタスクを行うこともできる。パートナーの書き込みの返信用のスペースに一旦全文を張り付けて、ネット上で添削してアップさせる。添削された側はその添削を受け入れたり拒否したりして、自分自身の英文を推敲して再度アップする。これは時間がかかる作業だが、事後課題として一定の期間内（例えば翌日の5時までなど）に完成させることもできる。または、学生同士のピア・フィードバックだけで終了したり、教師がアップされた修正英文をハードコピーし、赤ペン添削して返却することも考えられる。

### V. 最後に

教師は独自の授業の一定の流れを研究し確立しなければならない。早く確立しなければ、学習者はそれだけ非効率な授業を受け続け、不利益を被ることになる。一定の流れ、すなわち効果的

なタスクの組み合わせを毎度の授業で展開することで、学習者の技能の定着が期待できる。ワンパターン化することは決して改善を怠っているわけではなく、むしろ確立した教授法をその日の教師の気分などで変えたりしないようにするためにも必要である。

授業のパターン化が学生を飽きさせると考えるのは誤りである。学習の飽きを生じさせるのは、1 講義は同一の活動に終止している場合である。授業に限らず、会議等での経験からも共感できるように同一人物のモノローグを聞き続けるには、相当な集中力を要する。ましてや外国語の授業という特殊な環境で発達段階にある学習者に教師の一方的な話を聞かせ続けるのは本来は無理である。これは聞き手の責任ではなく、話し手のプレゼンテーションの仕方に問題があると言わざるを得ない。

本稿で紹介した授業の手順は、90 分内に 15 のステップを進む方法である。すなわち 10 分以内に次から次へとタスクを変えていく。この変化は決して居眠りさせる隙を与えず、飽きさせず、気づいたら講義が終わっていると感じさせるほどの集中力の持続を狙ったものである。このパターンを毎回繰り返すことで、飽きさせることなく技能の定着を図れるものと考えられる。

一定の教授法を確立した後は、時勢に合わせたデータを更新させる努力を続けなければならない。パターン化した授業のスタイルはいわば鯛焼や今川焼の鉄板の型のようなものである。一定の型を鑄造すれば繰り返し、素材（データ）を流し込めば焼き上げるのである。時代の流れと共に味を変えたりネタを変えるように、授業の目的と学習者の学習の段階に応じてデータも入れ替えて行くことが大切である。

IT 技術の進歩の恩恵を受けて、現在は教室外でも極めて授業での形態に近い形で学習者個人が独習できるようになった。音声ファイルとスクリプトが無料でダウンロードできるサイトも増え、無料の掲示板やチャット・ルームも無数にある。すなわち、この授業の進め方をすれば、四技能間の正の転移のみならず、教室での授業から個人の学習習慣の形成との促進という正の転移も期待できるのである。

## REFERENCES

- Anderson, A. & Lynch, T. (1988). *Listening*. Oxford: Oxford University Press.
- Asher, J. (1972). Children's first language as a model for second language learning. *The Modern Language Journal*, 56 (3), 3-17.
- Buck, G. (1992). Listening comprehension: construct validity and trait characteristics. *Language Learning*, 42 (3), 313-357.
- Chastain, K. (1987). The listening process. 「月例研究会報告 1987 年 5 月」『JACET 通信 64 号』 pp.54-58.
- Demauro, G. (1992). Examination of the relationships among TSE, TWE, and TOEFL score. *Language Testing*, 9 (2), 149-172.
- Itoh, K. (1986). *This is Plain English*. Tokyo: Nihon Honyakuka Yosei Gakkou.
- Kobayashi, T. (1999). Authenticity of translated texts in English. *Otaru University of Commerce, The Review of Liberal Arts*, 103, 47-92.
- Lund, R. A comparison of second language listening and reading comprehension. *The Modern Language Journal*, 75 (2), 196-205.
- Lyczak, R. (1979). The effects of exposure to a language on subsequent learning. *Language and Speech*, 22 (1), 81-88.
- Mueller, A. (1980). Visual contextual cues and listening comprehension: An experiment. *The Modern Language Journal*, 64 (3), 335-340.

- Nord, J. (1975). A case for listening comprehension. *Philologia*, 7, 1-25.
- Nord, J. (1981). Three steps leading to listening fluency: a beginning. In H. Winnits (Ed.), *The Comprehension Approach to Foreign Language Instruction* (pp.69-73).
- Ota, K & T. Otsu. (2002). *Reading TIME*. Tokyo: Eichosha.
- Pimsleur, P. & T. Quinn (1971). *The Psychology of Second Language Learning* (Papers from the Second International Congress of AILA). Cambridge: Cambridge University Press.
- Postovsky, V. (1974). Effects of delay in oral practice at the beginning of second language learning. *The Modern Language Journal*, 58 (5-6), 229-239.
- Reeds, J., Winitz, H., & Garcia, P. (1977). A test of reading following comprehension training. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 15 (4), 307-319.
- Suzuki, J. (1991). An empirical study on a remedial approach to the development of listening fluency: the effectiveness of pausing of students' listening comprehension ability. *Language Laboratory*, 28, 31-46.
- Wada, E. (1992). Book Review. *The Daily Yomiuri*, 8/22/1992.
- Wall, D., Clapham, C., & Alderson, T. (1994). Evaluating a placement test. *Language Testing*, 11 (3), 321-344.
- Zhao, Y. (1997). The effects of listeners' control of speech rate on second language comprehension. *Applied Linguistics*, 18 (1), 49-68.

## 参考文献

- 天野一夫 (1972). 「大学レベルにおける 3 技能に関する調査」『大学英語教育学会紀要第 3 号』 pp.15-44.
- 石川智子 (1986). 「聞く力と読む力書く力との相関について — 高等学校教育現場よりの一事例」『中部地区英語教育学会紀要第 16 号』 pp.103-108.
- 板倉武子・後田富久子 (1971). 「英語の聴覚理解力とリーディング力について」 *Language Laboratory*, 10, 3-14.
- 梅本堯夫 (1987). 『認知とパフォーマンス』 東京：東京大学出版会
- 岡秀夫 (1979). 「リスニングの測定 — 他の能力との関係」 *Language Laboratory*, 16, 38-48.
- 小池生夫他 (1979). 『外国語としての英語の Hearing 能力形成要因の実証的研究 (II)』 昭和 53 年度文部省科学研究費補助金特定研究「言語」
- 河野守夫 (1981). 「Listening 過程における音声心理の実験 — 日本人の英語学習の場合 —」『音声の研究第 19 号』 pp.171-186. 日本音声学会
- 河野守夫 (1990). 『リズム知覚のメカニズムと Listening comprehension』 文部省科学研究費重点領域 1989 年度研究「日本語音声」総括班
- 小林敏彦 (2002). 「時事英語教授法：複合的アプローチによるメディア英語の習得」『小樽商科大学人文研究第 103 号』 pp.23-83.
- 武井昭江編著 (2002). 『英語リスニング論』 東京：河源社
- 玉井健 (1992). 「“follow-up” のリスニング力向上に及ぼす影響及び “follow-up” 能力とリスニング力の関係」『STEP BULLETIN 4 号』 pp.48-62. 東京：日本英語検定協会
- 寺内正典・栗嶋三千代・井上昭博・井上紀子・栗嶋勇 (1989). 「聴くことの能力の伸長が読むことの能力の伸長に及ぼす転移に関する研究」『STEP BULLETIN 1 号』 pp.12-27. 東京：日本英語検定協会
- 門田修平・野呂忠司編著 (2002). 『英語リーディングの認知メカニズム』 東京：くろしお出版
- 吉田一衛 (1999). 『英語リスニングの実験的研究 — 技能相互の関係および学習効果、モチベーションを中心に』 東京：東京書籍